

Title	現代教師の日常性(I)
Author(s)	秦, 政春
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2002, 28, p. 118-149
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3960
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

現代教師の日常性()

秦 政 春

現代教師の日常性()

秦 政春

1 . 教師の現実

教師という職業は、どちらかといえば身近なものである。だれもが学校に通って、そこで教師の指導を受けたはずである。そして、いまどんな地域に行っても学校があり、教師がいる。自分の子どもが学校に通っていれば、好むと好まざるとにかかわらず教師の存在を意識せざるをえない。とはいえ、教師の存在が身近とはいっても、それはごく限られた断片にすぎない。教師の公的な生活についてはともかく、私的な生活をふくむ全体的なイメージはなかなか描きにくい。

たしかに、教師の仕事の中心は子どもたちを教育するということである。そして、その基本的部分に授業がある。しかし、これだけが教師の仕事ではない。ほかに、さまざまな仕事がある。校内では、こまごまとした事務的作業、いろいろな学校行事の企画、準備、運営、そして研修会や研究会活動など、がある。むろん、生徒指導もそれ以上に重要な仕事である。

校外でも、教育委員会や教育センターの主催する研修会への出席、PTA活動や子ども会活動をはじめとする地域的な活動への参加。そのうえ、自分のクラスに問題をかかえている子どもがいれば、家庭訪問もしなければならない。ほとんどの教師は、こうした一連の仕事を日常的にこなしている。ところが、こんな教師の日常性ですら、多くの人たちにはあまり知られていない。子どもの教育を学校に全面依存するという傾向がますます強まりつつあるが、これも教師の日常性に対する無理解に起因する部分も少なくない。

むろん、教師の日常性に対する無理解をことさらに非難しようというつもりはない。ここ最近、さまざまな領域で私事化が進行しているが、子どもたちの教育に関する限り、あくまでも公教育として「公」の立場で責任を負うべきものと考えている。その場合、その中心的な担い手である多くの教師の現実は、きわめて重要な意味をもつと考えられる。いま、教育改革の時代といわれる。これを逆にいえば、これまでかかえこんできた矛盾や問題状況が露呈してきた時代ともいえる。

こうした時代であるからこそ、多くの教師の日常性や現実を緻密に検討しておく必要がある。多くの教師は、「いま教師として」どんな状況におかれているのか。小学生にまで「荒れ」が進行した現在、教師と子どもたちとの関係はいったいどうなっているの

か。多くの教師は、授業に対して、学級運営に対して、そして生徒指導に対して、どんな指導観をもち、具体的にどんな指導をしているのか。教師集団の人間関係は、いまだんな状況なのか。

本小論では、こうした状況について、いくつかのデータからこれまでの推移もふくめて検討することにしたい。ただ、紙幅の制約もあり、今回は主として「いま教師として」どんな状況におかれているかということを中心にして分析を進めていくつもりである。

なお、使用したデータは、基本的には2000(平成12)年8月～9月に福岡県内の小・中学校教師を対象に実施した調査の結果による¹⁾。これのサンプル数は、小学校教師が687、中学校教師は454である。これに加えて、同じく福岡県内の小・中学校教師を対象にして、過去に実施した調査の結果も必要に応じて使用している。

2. 苦悩する教師

率直に言って、多くの教師のおかれた現実はかなり厳しい。以下、すこし具体的なデータをみておきたい。たしかに、とても多くの教師が、教師という仕事にやりがいを感じるとしている。表2-1に示したように、やりがいをとても感じるという小学校教師は46.7%、やや感じる46.9%、あわせると93.6%に達する。中学校教師でも、それぞれ35.2%と54.4%を数えており、あわせて89.6%になる。そして、表2-2をみればわかるように、全体の8割以上にもおよぶ小・中学校教師が、教師として十分に努力しているという。この結果をみるかぎり、圧倒的多数の教師が仕事自体は魅力的なものと感じており、しかも教師として十分に努力しているということになる。

しかし、その現実、ないしは日常性といったことになると、かなり厳しい状況がある。たとえば、表2-3のように、毎日の生活について、とてもゆとりがあるという小学校

表2-1 教師という仕事にやりがい

単位：%

学校段階 \ やりがい	とても感じている	やや感じている	あまり感じていない	まったく感じていない	D.K.,N.A.	計(N)
小学校教師	46.7	46.9	5.7	0.0	0.7	100.0(687)
中学校教師	35.2	54.4	9.9	0.0	0.4	100.0(454)
計	42.2	49.9	7.4	0.0	0.6	100.0(1141)

表2-2 教師として十分に努力

単位：%

学校段階 \ 十分に努力	とても思う	やや思う	あまり思わない	まったく思わない	D.K.,N.A.	計(N)
小学校教師	14.3	69.4	15.7	0.1	0.4	100.0(687)
中学校教師	16.1	65.4	17.0	0.9	0.7	100.0(454)
計	15.0	67.8	16.2	0.4	0.5	100.0(1141)

教師は0.9%、ややゆとりがある13.0%、あまりゆとりがない53.6%、そしてまったくゆとりがないという割合が32.5%にもなる。中学校教師もまったく同じ傾向を示しており、順に0.4%、13.7%、53.3%、そして32.4%である。したがって、全体の8割をはるかにこえる小・中学校教師が、ほとんどゆとりのない日常生活を送っている。

そうした状況の反映であろうか、学校(職場)に行きたくないと思うことがあるという教師が少なくない。表2-4のように学校(職場)に行きたくないと思うことが、よくあるという小学校教師は13.2%、ときどきある45.0%、あわせると58.2%になる。中学校教師は、それぞれ13.7%と47.8%を数えており、あわせて61.5%である。よくある、ときどきあるという2つの割合をあわせた数値を過去のデータと比べてみると、小学校教師の場合、1990(平成2)年が51.0%、1996(平成8)年は58.7%、そして2000(平成12)年がさきほどのように58.2%である。中学校教師の場合は、順に51.4%、51.2%、61.5%といった具合。横ばい、ないしは微増といったところである。

とはいえ、学校(職場)に行きたくないという程度であれば、それほど深刻な状況ではない。しかし、教師という職業は自分にむいていないと思うということになると、考えようによっては一種の教師不適応、ないしは教職不適応ということになる。ところが、この割合もかなり多い。表2-5をみると、自分にむいていないと思うことが、よくあるという小学校教師は11.2%、ときどきある48.8%、中学校教師の場合は順に15.2%と49.1%である。小・中学校教師ともに、あわせると全体の6割に達している。

ここでも、さきほどと同じ要領で過去のデータと比べてみると、小学校教師が順に58.1%、53.9%、60.0%、中学校教師は53.2%、50.9%、64.3%である。微増とはいえ、明

表2-3 毎日の生活

単位：%

毎日の生活 学校段階	とても ゆとりがある	やや ゆとりがある	あまり ゆとりがない	まったく ゆとりがない	D.K.,N.A.	計(N)
小学校教師	0.9	13.0	53.6	32.5	0.1	100.0(687)
中学校教師	0.4	13.7	53.3	32.4	0.2	100.0(454)
計	0.7	13.2	53.5	32.4	0.2	100.0(1141)

表2-4 学校(職場)に行きたくない

単位：%

行きたくない と思うこと 学校段階・年度	よくある	ときどき ある	あまり ない	まったく ない	D.K.,N.A.	計(N)
小学校教師 平成2年	11.9	39.1	35.0	12.2	1.7	100.0(294)
平成8年	13.5	45.2	26.5	7.8	7.1	100.0(423)
平成12年	13.2	45.0	33.9	7.7	0.1	100.0(687)
中学校教師 平成2年	12.9	38.5	30.6	17.3	0.7	100.0(278)
平成8年	13.7	37.5	31.7	10.5	6.7	100.0(344)
平成12年	13.7	47.8	32.8	5.3	0.4	100.0(454)

らかな増加傾向を示している。それにしても、全体の6割にもおよぶ小・中学校教師が、自分は教師にむいていないと思っているという状況は、やはり問題を感じる。似たような傾向は、表2-6の授業をするのが苦痛に思うというデータにもあらわれている。授業をするのが苦痛に思うことが、よくあるという小学校教師は54%、ときどきある52.1%、中学校教師は順に9.7%と53.1%である。こうした状況は、つぎの表2-7に示した学級担任をやめたいということについても、ほとんど同様に認められる。こうした結果をみると、さまざまな疲労感や不適応感が、多くの教師を支配していることはまちがいない。

そして、教師をやめたいと感じている割合である。いま、教師をやめたいと強く感じているという小学校教師は、表2-8に示したように8.9%、すこし感じているという割合が37.1%である。中学校教師は9.0%と37.7%を数えている。この数値そのものを、どう読めばよいのか、そしてどう解釈すべきかということについては、かならずしも簡単ではない。そこで、これについても、さきほどと同じ要領で過去のデータと比べてみると、小学校教師が順に37.5%、40.9%、46.0%、中学校教師は38.5%、32.8%、46.7%である。あえて指摘するまでもなく、かつてと比べて確実に割合が増加してきている。

表2-5 教師という職業は自分にむいていない

単位：%

むいていないと思う 学校段階・年度		よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K.,N.A.	計(N)
	平成8年	13.7	40.2	30.3	8.7	7.1	100.0(423)
	平成12年	11.2	48.8	34.4	5.2	0.4	100.0(687)
中学校教師	平成2年	14.4	38.8	30.9	15.1	0.7	100.0(278)
	平成8年	13.4	37.5	30.5	12.2	6.4	100.0(344)
	平成12年	15.2	49.1	29.7	5.1	0.9	100.0(454)

表2-6 授業が苦痛

単位：%

苦痛に思う 学校段階		よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K.,N.A.	計(N)
中学校教師	9.7	53.1	30.8	5.3	1.1	100.0(454)	
計	7.1	52.5	34.7	4.7	1.0	100.0(1141)	

表2-7 学級担任をやめたい

単位：%

やめたいと思う 学校段階		よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K.,N.A.	計(N)
中学校教師	12.3	32.8	38.1	15.2	1.5	100.0(454)	
計	8.8	32.4	39.6	18.3	0.9	100.0(1141)	

表 2 - 8 いま教師をやめたい

単位：%

いまま教師をやめたい		強く 感じている	すこし 感じている	あまり 感じていない	まったく 感じていない	D.K.,N.A.	計(N)
学校段階・年度							
小学校教師	平成 2 年	6.5	31.0	29.9	29.9	2.7	100 (294)
	平成 8 年	9.0	31.9	28.6	23.6	6.9	100 (423)
	平成12年	8.9	37.1	27.9	25.3	0.7	100 (687)
中学校教師	平成 2 年	9.7	28.8	33.1	26.6	1.8	100 (278)
	平成 8 年	8.1	24.7	34.3	26.5	6.4	100 (344)
	平成12年	9.0	37.7	31.1	21.8	0.4	100 (454)

その事実だけでも、やはり問題は少くない。

むろん、なんらかの職業に従事していれば、ときおりやめたくなるということも不思議なことではない。しかし、冒頭で述べたように、多くの教師が仕事自体にはやりがいを感じていながら、いっぽうでやめたいと感じているという矛盾した状況は、いま教師のおかれた現実の厳しさをものがたるものにほかならない。しかも、やめたいという割合が明らかに増加しているという事実とあわせて考えると、かならずしも楽観できる事態ではない。

3 . 教師のストレスに関する状況

こんな状態からすれば、当然のことともいえるが、やはりストレスのたまっている教師は多い。表 3 - 1 に示した2000(平成12)年のデータをみると、ストレスがとてたまっている、すこしたまっているという2つの割合をあわせた数値は、小・中学校教師ともに全体のほぼ7割である。ただ、この割合を過去のデータと比べてみると、ほんのすこし低くなっている。とはいえ、まだまだ減少傾向といえるような状況ではない。むしろ、平成に入って以降、教師のストレスに関しては多少の増減をくりかえしてはいるが、教師をとりまく問題状況そのものはそのまま継続しているとみたほうがよい。

そのことは、表 3 - 2 と表 3 - 3 に示した、ストレスによるさまざまな症状の推移を

表 3 - 1 教師のストレス

単位：%

ストレス		とてま たまっている	すこし たまっている	あまり たまっていない	まったく たまっていない	D.K.,N.A.	計(N)
学校段階・年度							
小学校教師	平成 2 年	22.4	52.0	23.1	1.7	0.7	100 (294)
	平成 8 年	24.6	53.7	20.3	0.9	0.5	100 (423)
	平成12年	19.1	52.8	23.9	3.9	0.3	100 (687)
中学校教師	平成 2 年	18.3	50.4	26.6	4.0	0.7	100 (278)
	平成 8 年	28.5	46.8	20.1	3.2	1.5	100 (344)
	平成12年	22.5	48.9	23.6	4.6	0.4	100 (454)

みれば明らかである。どの症状についても、ほとんど減少していない。減少どころか、なかには増加傾向をみせているような症状も、いくつかみうけられる。そして、これに

表3-2 ストレスによる症状（小学校教師）

単位：％

年度・頻度 症 状	平成2年			平成8年			平成12年		
	よくある	ときどきある	計	よくある	ときどきある	計	よくある	ときどきある	計
イライラする	18.0	53.4	71.4	15.8	54.4	70.2	12.7	60.0	72.7
情緒不安定	5.8	33.3	39.1	4.7	25.5	30.2	3.2	28.8	32.0
寝つきが悪い	6.5	22.4	28.9	6.6	22.9	29.5	4.8	20.8	25.6
食欲不振	2.4	8.8	11.2	2.8	13.7	16.5	1.6	11.9	13.5
過食	5.8	19.4	25.2	5.0	21.5	26.5	4.8	26.1	30.9
無気力	4.4	32.0	36.4	6.4	29.6	36.0	2.3	30.0	32.3
気分がすぐれない	14.3	43.2	57.5	9.9	41.1	51.0	5.2	44.1	49.3
足どりが重い	9.9	36.1	46.0	10.2	39.5	49.7	7.7	40.8	48.5
仕事のことを考えたくない	15.3	40.8	56.1	19.1	43.5	62.6	13.8	41.8	55.6
ボーッとしてしまう	8.8	33.7	42.5	9.9	38.5	48.4	6.6	39.6	46.2
なにもかも投げだしたい	12.6	26.5	39.1	9.5	25.1	34.6	5.2	28.1	33.3
大声をだしたい	5.1	15.3	20.4	5.0	16.5	21.5	2.3	21.3	23.6
泣きたい	4.1	12.6	16.7	2.6	13.7	16.3	1.9	13.7	15.6
暴力的である	1.0	4.4	5.4	1.2	6.4	7.6	0.7	11.4	12.1

(注)1. ストレスの症状については、病的なものだけではなく多様なものを問題にした。したがって、ここではストレスによる、あくまでも広い意味における症状と考えてよい。

2. 全体の割合を示している。

3. 「計」はそれぞれの症状が「よくある」と「ときどきある」の2つの割合をあわせた数値である。(つぎの表3-3についても同様)

表3-3 ストレスによる症状（中学校教師）

単位：％

年度・頻度 症 状	平成2年			平成8年			平成12年		
	よくある	ときどきある	計	よくある	ときどきある	計	よくある	ときどきある	計
イライラする	13.7	50.0	63.7	16.3	48.3	64.6	17.8	57.7	75.5
情緒不安定	4.7	30.6	35.3	7.8	23.5	31.3	4.6	27.3	31.9
寝つきが悪い	6.8	21.2	28.0	9.3	25.9	35.2	5.5	22.7	28.2
食欲不振	2.2	10.1	12.3	2.9	14.2	17.1	3.5	13.0	16.5
過食	4.0	16.2	20.2	6.1	22.4	28.5	3.7	25.6	29.3
無気力	3.2	26.6	29.8	4.4	27.3	31.7	3.1	35.5	38.6
気分がすぐれない	10.4	47.1	57.5	9.9	39.2	49.1	8.1	45.6	53.7
足どりが重い	7.6	31.7	39.3	8.4	36.9	45.3	7.9	40.7	48.6
仕事のことを考えたくない	13.3	32.7	46.0	18.0	34.9	52.9	13.0	42.3	55.3
ボーッとしてしまう	7.6	31.3	38.9	8.4	29.1	37.5	7.5	41.9	49.4
なにもかも投げだしたい	9.4	19.8	29.2	8.1	25.0	33.1	6.6	26.4	33.0
大声をだしたい	2.9	12.6	15.5	7.0	17.7	24.7	3.7	21.8	25.5
泣きたい	2.5	8.3	10.8	3.8	12.8	16.6	2.2	11.0	13.2
暴力的である	0.0	6.1	6.1	0.3	6.4	6.7	0.5	12.6	13.1

関しては、割合が増えた減ったということより、その割合自体がかなり高いことに問題がある。たとえば、よくある、ときどきあるという2つの割合をあわせた数値でみると、イライラするということが7割以上、情緒不安定が3割以上、無気力も3割以上、過食が3割ほど、寝つきが悪いということでも2割以上の教師に生じている。いうまでもなく、教師という職業は、教室という閉ざされた空間のなかで、子どもたちと日常的に密着したかたちで行なわれる仕事である。このことを考えれば、なおさらこの数値のもつ意味は深刻である。

そこで、教師にこれほどのストレスをもたらしている原因や要因、ないしは背景といったものについてみておきたい。表3-4は、いまいちばんストレスを感じているという内容についてまとめたものである。これをみると、小・中学校教師ともに、やはり多忙というものがもっとも高い割合をしめている。小学校教師は36.0%、中学校教師が35.3%である。以下、小学校教師の場合は、研究授業、自分自身の力量、管理職の力量、子どもの保護者との関係、そして同僚教師との人間関係といった順に並んでいる。中学校教師になると、同僚教師との人間関係、子どもとの関係、そして研究授業といった具合である。

ここしばらく、中学校だけではなく小学校でも、子どもの「荒れ」が話題になってい

表3-4 ストレスの原因(いまいちばんストレスを感じている内容、1つだけ)

単位：%

学校段階・年度 内 容	小学校教師			中学校教師		
	平成2年	平成8年	平成12年	平成2年	平成8年	平成12年
同僚教師との人間関係	12.9	9.1	7.6	10.9	11.6	8.8
子どもとの関係	3.8	4.1	2.3	7.2	4.9	7.4
子どもの保護者との関係	2.1	5.0	7.9	2.3	3.0	3.0
管理職の力量	10.5	9.8	8.4	5.3	5.8	4.6
子どもの問題行動	4.9	4.6	3.0	14.0	8.5	6.7
給料	1.7	0.5	0.6	4.2	1.2	1.9
自分自身の力量	11.8	7.9	12.0	12.1	8.5	6.5
ほかの教師の力量	1.0	0.2	0.9	6.8	3.0	1.9
多忙	50.2	30.7	36.0	34.3	28.7	35.3
校務分掌	-	1.2	1.5	-	2.4	2.6
P.T.A関係・地域との関わり	-	1.4	2.3	-	1.5	0.5
部活動	-	0.0	0.0	-	5.2	6.7
異動	-	1.4	0.8	-	2.7	1.4
昇進	-	0.0	0.5	-	0.0	0.9
学校行事の準備	-	0.5	1.7	-	1.5	4.2
研究授業	-	19.2	14.3	-	7.6	7.2
D.K.,N.A.	1.0	4.3	0.3	3.0	3.7	0.5
計(N)	100 (287)	100 (417)	100 (658)	100 (265)	100 (328)	100 (431)

(注)1. ストレスが「まったくたまっていない」というサンプル、およびストレス状況に関して無記入のサンプルは、集計から除外した。

る。しかし、そのわりには、この問題は教師のストレスの原因にはなっていない。また、ここでも過去のデータと比べてみると、小・中学校教師ともに多忙の割合が明らかに増えてきていることがわかる。年々、教師は忙しくなっているという実態を、まさに象徴する結果と考えてよい²⁾。そして、小学校教師の場合、自分自身の力量という割合も、わずかながら増えてきている。これについては、おそらく最近の小学生の「荒れ」と無関係ではないと考えられる³⁾。学級が「荒れ」る、授業が成立しないということが、ベテラン教師の教室でも生じているという状況の反映にちがいない⁴⁾。

続いて、表3-5と表3-6に示した結果である。これは、さきほどのストレスの原因や背景に関する内容について個別に回答してもらったものである。これに関して、基本的にはすでにみた結果と大差はない。そのなかで、小・中学校教師に関して校務分掌と学校行事の準備の2つ、そして中学校教師に関して部活動という内容が、ここでは高い割合を数えている。この3つの内容については、さきほどの結果では、ほとんどめだつような割合を示していなかった。したがって、こうした内容というのは、ストレスの最大の原因というわけではないが、教師にストレスを感じさせる重要な要素の1つということになる。

表3-5 ストレスを感じる内容（小学校教師）

単位：%

年度・程度 内 容	平成2年			平成8年			平成12年		
	強く感じる	すこし感じる	計	強く感じる	すこし感じる	計	強く感じる	すこし感じる	計
同僚教師との人間関係	20.9	41.1	62.0	21.1	38.6	59.7	10.6	35.9	46.5
子どもとの人間関係	10.1	31.0	41.1	8.4	37.4	45.8	4.9	29.5	34.4
子どもの保護者との関係	8.7	31.0	39.7	15.8	43.4	59.2	14.7	38.4	53.1
管理職の力量	34.5	33.1	67.6	33.3	34.1	67.4	22.3	34.0	56.3
子どもの問題行動	19.9	33.1	53.0	21.6	36.9	58.5	11.6	32.5	44.1
給料	18.8	38.0	56.8	3.8	18.5	22.3	6.1	27.2	33.3
自分自身の力量	34.1	47.7	81.8	29.0	53.5	82.5	21.4	54.7	76.1
ほかの教師の力量	11.5	33.8	45.3	6.2	36.5	42.7	5.8	30.2	36.0
多忙	73.2	17.8	91.0	66.9	24.2	91.1	64.1	27.7	91.8
校務分掌	-	-	-	26.4	42.4	68.8	22.3	39.8	62.1
PTA関係・地域との関わり	-	-	-	13.2	39.8	53.0	12.2	36.5	48.7
部活動	-	-	-	0.2	5.8	6.0	0.6	3.8	4.4
異動	-	-	-	18.7	33.1	51.8	15.0	24.9	39.9
昇進	-	-	-	2.9	10.1	13.0	2.0	8.5	10.5
学校行事の準備	-	-	-	21.1	45.3	66.4	21.7	46.8	68.5
研究授業	-	-	-	57.3	30.7	88.0	45.4	36.9	82.3

(注)1. ストレスが「まったくない」というサンプル、およびストレス状況に関して無記入のサンプルは集計から除外した。

2. 「計」はそれぞれの内容について、ストレスを「強く感じる」と「すこし感じる」の2つの割合をあわせた数値である。

(つぎの表3-6についても同様)

表3 - 6 ストレスを感じる内容(中学校教師)

単位：%

年度・程度 内 容	平成2年			平成8年			平成12年		
	強く感じる	すこし感じる	計	強く感じる	すこし感じる	計	強く感じる	すこし感じる	計
同僚教師との人間関係	17.0	42.3	59.3	23.5	40.5	64.0	15.1	35.5	50.6
子どもとの人間関係	12.8	43.8	56.6	14.3	39.6	53.9	10.3	40.4	50.7
子どもの保護者との関係	6.8	21.2	28.0	12.8	43.3	56.1	10.4	35.5	45.9
管理職の力量	25.3	43.4	68.7	22.9	30.8	53.7	19.5	28.8	48.3
子どもの問題行動	28.3	45.3	73.6	27.4	41.8	69.2	17.4	45.8	63.2
給料	26.0	37.4	63.4	7.6	23.2	30.8	8.8	25.5	34.3
自分自身の力量	26.4	50.6	77.0	25.9	45.4	71.3	21.1	47.6	68.7
ほかの教師の力量	16.6	50.2	66.8	12.2	39.6	51.8	7.4	39.4	46.8
多忙	64.9	25.7	90.6	62.8	27.7	90.5	63.8	27.8	91.6
校務分掌	-	-	-	26.8	44.2	71.0	25.5	38.3	63.8
PTA関係・地域との関わり	-	-	-	16.2	33.5	49.7	11.4	39.0	50.4
部活動	-	-	-	20.7	30.5	51.2	21.6	31.3	52.9
異動	-	-	-	17.4	25.6	43.0	15.8	24.6	40.4
昇進	-	-	-	3.0	7.0	10.0	3.0	6.7	9.7
学校行事の準備	-	-	-	20.1	42.4	62.5	28.5	39.4	67.9
研究授業	-	-	-	41.5	30.8	72.3	35.0	37.4	72.4

4 . ストレスによる影響

教師のストレスに関して、ただたんに個人的にストレスを感じているというだけなら、まだ問題は少ない。しかし、けっしてそれだけのことではない。さきほどみたように、さまざまな症状を複合的にかかえた教師がかなり多い。そうした厳しい症状をみただけでも、ストレスによる影響が多様に生じていることが予想できる。そこで、さきほどの学校(職場)に行きたくない、教師にむいていない、教師をやめたいといったことと、ストレスとがどのように結びついているのか、まずみておきたい。これに関するいくつかの要因の相互の相関係数を示したものが、表4 - 1と表4 - 2である。

小・中学校教師ともに、いずれもかなり高い相関係数を数えていることがわかる。したがって、ストレスのたまっている教師は、その結果として学校(職場)に行きたくない、教師にむいていない、学級担任をやめたい、授業が苦痛、そして教師をやめたいといったように、複合的、ないしは累積的に厳しい状況になっているのではないかと考えられる。むろん、これに関する因果関係はきわめて複雑であり、それと逆の要素のあることも否定できない。これについてはともかく、ストレスのたまっている教師がこれほど複合的、累積的に厳しい状態におかれているとすれば、この影響が子どもたちにおよんでいる可能性も高い。

いうまでもなく、これが教師のストレスに関するもっとも重大な問題状況である。こ

表4-1 ストレスによる影響（小学校教師）

単位：%

影 響	平成2年			平成8年			平成12年		
	よくある	ときどきある	計	よくある	ときどきある	計	よくある	ときどきある	計
必要以上に子どもを叱ってしまう	14.3	48.8	63.1	11.5	47.5	59.0	5.8	45.0	50.8
子どもの扱いにムラがでてしまう	8.0	41.5	49.5	6.2	38.6	44.8	4.3	33.1	37.4
子どもとの対話がなくなってしまう	8.4	28.9	37.3	5.0	30.9	35.9	5.2	34.3	39.5
いいかげんな授業をしてしまう	5.2	35.5	40.7	4.6	36.0	40.6	3.2	42.9	46.1
子どもにあたってしまう	5.6	32.4	38.0	4.8	28.1	32.9	2.0	28.6	30.6
体罰をしてしまう	1.0	15.0	16.0	0.2	3.6	3.8	0.3	4.0	4.3
学校（授業）を休んでしまう	0.3	5.2	5.5	0.2	3.4	3.6	0.3	4.6	4.9
ほかの教師にあたってしまう	0.0	4.5	4.5	0.0	3.1	3.1	0.2	4.6	4.8

(注)1. ストレスが「まったくたまっていない」というサンプル、およびストレス状況に関して無記入のサンプルは集計から除外した。

2. 「計」はそれぞれの影響が「よくある」と「ときどきある」の2つの割合をあわせた数値である。(つぎの表4-2についても同様)

表4-2 ストレスによる影響（中学校教師）

単位：%

影 響	平成2年			平成8年			平成12年		
	よくある	ときどきある	計	よくある	ときどきある	計	よくある	ときどきある	計
必要以上に子どもを叱ってしまう	4.5	38.5	43.0	4.3	30.2	34.5	3.5	26.2	29.7
子どもの扱いにムラがでてしまう	4.2	38.9	43.1	4.0	35.1	39.1	3.9	31.3	35.2
子どもとの対話がなくなってしまう	4.2	29.4	33.6	5.2	39.0	44.2	5.3	37.6	42.9
いいかげんな授業をしてしまう	1.5	27.2	28.7	5.8	28.4	34.2	4.2	37.1	41.3
子どもにあたってしまう	2.6	21.9	24.5	3.0	18.6	21.6	1.4	15.8	17.2
体罰をしてしまう	0.0	12.8	12.8	0.3	2.7	3.0	0.2	2.3	2.5
学校（授業）を休んでしまう	0.8	12.5	13.3	2.1	9.1	11.2	1.9	12.1	14.0
ほかの教師にあたってしまう	0.4	9.8	10.2	1.8	5.5	7.3	0.0	7.7	7.7

れの結果を、表4-3と表4-4にまとめておいた。これを見ると、教師のストレスによる、まさに悪影響がさまざまなかたちで生じている。よくある、ときどきあるという2つの割合をあわせた数値を紹介しておく、必要以上に子どもを叱ってしまうということが、小学校教師は50.8%、中学校教師が29.7%である。いいかげんな授業をしてしまうということが、小学校教師46.1%、中学校教師は41.3%である。子どもとの対話がなくなってしまう39.5%と42.9%、子どもの扱いにムラがでてしまう37.4%と35.2%、子どもにあたってしまう30.6%と17.2%といった具合。

表4-3 教師のストレスに関連する要因の相関係数(小学校教師)

要因	ストレス	学校 職場に 行きたくない	教師に むいていない	教師を やめたい	学級担任を やめたい	授業が苦痛
ストレス		446	309	417	289	323
学校 職場に行きたくない			417	565	545	482
教師にむいていない				496	480	338
教師をやめたい					547	364
学級担任をやめたい						447
授業が苦痛						

- (注)1.ピアソンの積率相関係数を用いた。相関係数は1%水準ですべて有意。
 2.それぞれの要因の数値については、いずれも1から4の数字をあてはめた(これまでの各表を参照のこと)。
 3.分析に用いたどちらかの要因に無記入のあるサンプルは、集計から除外した。
 (つぎの表4-4についても同様)

表4-4 教師のストレスに関連する要因の相関係数(中学校教師)

要因	ストレス	学校 職場に 行きたくない	教師に むいていない	教師を やめたい	学級担任を やめたい	授業が苦痛
ストレス		554	339	510	351	307
学校 職場に行きたくない			436	496	435	453
教師にむいていない				507	424	287
教師をやめたい					484	313
学級担任をやめたい						347
授業が苦痛						

- (注)1.相関係数は1%水準ですべて有意。

たしかに、過去のデータと比べてみると、必要以上に子どもを叱ってしまう、子どもの扱いにムラがでてしまう、子どもにあたってしまふという3つについては、割合が減少してきている。しかし、いくら割合が減少してきているとはいえ、いまでも割合自体はけっこう低いものではない。それどころか、子どもとの対話がなくなってしまうということについては、ほぼ横ばいの状態が続いている。そのうえ、いいかげんな授業をしてしまうということになると、むしろ増加傾向をみせているほどである。その意味でも、問題状況はけっこう解消されていないといわざるをえない。

ところで、ストレスのたまっている教師とひとことでいっても、とてもたまっている場合もあれば、すこしたまっているということもある。そこで、ストレスのたまっている程度によって、子どもたちに対する影響にどのくらいのちがいがいいのかみた結果が表4-5と表4-6である。やはり、ストレスがとてもたまっているという教師ほど、さまざまな影響がより多く、しかも多様に生じていることがわかる。しかし、かといってストレスがすこしたまっている、ないしはあまりたまっていない教師の場合でも、そうした影響がないわけではない。なかでも、とくにストレスがすこしたまっているという教師についてみてみると、こうした影響がけっこう少なくないことが明らかである。これに関しては、小・中学校教師に共通してあてはまっているが、内容によってはスト

レスがとてもたまっている教師とほとんど変わらないほどの割合を数えているものもある。その意味では、教師のストレスに関するかぎり、かりにすこしたまっているという程度であっても、われわれが想像する以上の深刻さがあるとみえる。それだけ、教師のストレスというのは、予想以上に厳しいことをもものがたっている。

これについては、つぎの表4 - 7からも明らかである。この結果は、子どもたちに対して、いじめたと感じる、思わずどなってしまう、ムカついたり、キレることがどのくらいあるのか、ストレスとの関連でみたものである。ストレスのたまっている教師の場合、思わず子どもをいじめてしまう、どなってしまう、そしてムカついたり、キレしてしまうというようなことが比較的よく生じていることがわかる。おそらく、ストレスによるイライラした状態が、そうした事態をまねいていると考えてよい。

表4 - 5 ストレスによる影響（小学校教師）

単位：%

教師のストレス状況 影響	ストレスがとても たまっている教師	ストレスがすこし たまっている教師	ストレスがあまり たまっていない教師	計
必要以上に子どもを叱ってしまう	55.0(11.5)	57.0(5.2)	33.0(2.4)	50.0(5.8)
子どもの扱いにムラがでてしまう	41.0(7.6)	40.0(4.7)	26.0(0.6)	37.0(4.3)
子どもとの対話がなくなってしまう	51.0(9.9)	38.0(4.4)	31.0(3.0)	39.0(5.2)
いいかげんな授業をしてしまう	59.0(10.7)	46.0(1.4)	34.0(1.2)	46.0(3.2)
子どもにあたってしまう	35.0(4.6)	35.0(1.4)	16.0(1.2)	30.0(2.0)
体罰をしてしまう	6.0(1.5)	3.0(0.0)	4.0(0.0)	4.0(0.3)
学校（授業）を休んでしまう	12.0(0.8)	3.0(0.3)	1.0(0.0)	4.0(0.3)
ほかの教師にあたってしまう	10.0(0.8)	3.0(0.0)	2.0(0.0)	4.0(0.2)

(注)1. それぞれの影響が「よくある」と「ときどきある」の2つの割合をあわせた数値。また、カッコ内の数値はそのうち「よくある」の割合で内数を示している。

2. ストレスが「まったくたまっていない」というサンプル、およびストレス状況に関して無記入のサンプルは集計から除外した。

(つぎの表4 - 6についても同様)

表4 - 6 ストレスによる影響（中学校教師）

単位：%

教師のストレス状況 影響	ストレスがとても たまっている教師	ストレスがすこし たまっている教師	ストレスがあまり たまっていない教師	計
必要以上に子どもを叱ってしまう	40.0(9.8)	32.0(2.3)	15.0(0.0)	29.0(3.5)
子どもの扱いにムラがでてしまう	51.0(8.8)	36.0(3.6)	16.0(0.0)	35.0(3.9)
子どもとの対話がなくなってしまう	49.0(9.8)	48.0(4.5)	25.0(2.8)	42.0(5.3)
いいかげんな授業をしてしまう	48.0(10.8)	46.0(3.2)	24.0(0.0)	41.0(4.2)
子どもにあたってしまう	30.0(4.9)	17.0(0.5)	4.0(0.0)	17.0(1.4)
体罰をしてしまう	3.0(0.0)	2.0(0.5)	0.0(0.0)	2.0(0.2)
学校（授業）を休んでしまう	23.0(5.9)	12.0(0.9)	7.0(0.0)	14.0(1.9)
ほかの教師にあたってしまう	10.0(0.0)	8.0(0.0)	2.0(0.0)	7.0(0.0)

表4 - 7 教師のストレス状況と子どもたちに対する態度

単位：%

子どもたちに対する態度		いじめたと 感じる	思わず どなってしまふ	ムカつく	キレル
学校段階・ 教師のストレス状況					
小学校 教師	ストレスがとてもたまっている教師	12.3(0.8)	67.9(13.7)	42.0(3.8)	22.1(1.5)
	すこしたまっている教師	9.1(0.3)	65.0(6.3)	33.1(2.5)	10.5(0.6)
	あまりたまっていない教師	9.8(0.0)	53.1(5.5)	17.7(0.0)	3.0(0.0)
	まったくたまっていない教師	0.0(0.0)	37.0(3.7)	11.1(3.7)	3.7(0.0)
	D.K.,N.A.	100.0(0.0)	50.0(0.0)	100.0(0.0)	50.0(0.0)
	計	9.8(0.3)	61.5(7.4)	30.4(2.2)	10.8(0.6)
中学校 教師	ストレスがとてもたまっている教師	7.9(1.0)	58.8(9.8)	66.7(16.7)	28.5(1.0)
	すこしたまっている教師	9.0(0.0)	52.7(4.1)	52.7(5.9)	16.7(0.5)
	あまりたまっていない教師	12.1(0.0)	44.9(1.9)	39.2(2.8)	11.2(0.0)
	まったくたまっていない教師	0.0(0.0)	38.1(9.5)	9.5(0.0)	0.0(0.0)
	D.K.,N.A.	50.0(0.0)	100.0(0.0)	100.0(0.0)	50.0(0.0)
	計	9.2(0.2)	51.8(5.1)	50.9(7.3)	17.4(0.4)

(注)1. それぞれの態度が「よくある」と「ときどきある」の2つの割合をあわせた数値。また、カッコ内の数値は、そのうち「よくある」の割合で内数を示している。

5. ストレスによる影響と教師の日常

すでに冒頭でふれたように、学校(職場)に行きたくないと思うことがあるという教師は、けっして少数ではない。小・中学校教師全体の6割前後を数えているほどである。しかも、学校(職場)に行きたくないと思っていることは、ストレスと無関係ではないことも明らかになった。ここで、学校(職場)に行きたくないと思っている教師について、すこしふれておきたい。こうした教師の場合、さきほどのストレスによる子どもたちに対する影響が、どういった具合に生じているのかみた結果が表5 - 1と表5 - 2である。また、表5 - 3は子どもたちに対するネガティブな態度との関連についてまとめたものである。この一連の結果をみてみると、学校(職場)に行きたくないと思うことがよくあるという教師になると、子どもたちに対するネガティブな影響がかなり高い割合で生じていることがわかる。

たとえば、学校(職場)に行きたくないと思うことがよくあるという小学校教師では、いいかげんな授業をしてしまうということが、よくある、ときどきあるという2つの割合をあわせた数値が65.9%に達している。同じく、必要以上に子どもを叱ってしまう60.5%、子どもとの対話がなくなってしまう58.3%、子どもの扱いにムラがでてしまう47.3%、子どもにあたってしまうということが44.0%を数えている。

学校(職場)に行きたくないことがよくあるという中学校教師でも、いいかげんな授業をしてしまう59.7%、子どもの扱いにムラがでてしまう54.9%、子どもとの対話がなくなってしまう50.0%、必要以上に子どもを叱ってしまう38.7%、子どもにあたってし

表5 - 1 学校(職場)に行きたくないと思うこととストレスによる影響(小学校教師)

単位：%

影 響 \ 行きたくないと思うこと	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K.,N.A.	計
必要以上に子どもを叱ってしまう	60.5(14.5)	58.9(4.9)	38.6(4.3)	13.2(0.0)	0.0(0.0)	48.6(5.5)
子どもの扱いにムラがでてしまう	47.3(9.9)	40.1(4.5)	30.9(2.1)	13.2(0.0)	0.0(0.0)	35.8(4.1)
子どもとの対話がなくなってしまう	58.3(12.1)	38.8(5.5)	32.6(2.1)	20.8(1.9)	0.0(0.0)	37.8(4.9)
いいかげんな授業をしてしまう	65.9(11.0)	49.2(2.6)	34.8(1.3)	18.9(0.0)	0.0(0.0)	44.1(3.1)
子どもにあたってしまう	44.0(6.6)	35.3(1.0)	20.6(1.7)	7.5(0.0)	0.0(0.0)	29.3(1.9)
体罰をしてしまう	6.6(1.1)	3.9(0.3)	3.9(0.0)	1.9(0.0)	0.0(0.0)	4.1(0.3)
学校(授業)を休んでしまう	14.3(1.1)	4.5(0.3)	2.1(0.0)	0.0(0.0)	0.0(0.0)	4.7(0.3)
ほかの教師にあたってしまう	8.8(1.1)	4.5(0.0)	3.4(0.0)	1.9(0.0)	0.0(0.0)	4.5(0.1)

(注)1. それぞれの影響が「よくある」と「ときどきある」の2つの割合をあわせた数値。また、カッコ内の数値はそのうち「よくある」の割合で内数を示している。

(つぎの表5 - 2についても同様)

表5 - 2 学校(職場)に行きたくないと思うこととストレスによる影響(中学校教師)

単位：%

影 響 \ 行きたくないと思うこと	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K.,N.A.	計
必要以上に子どもを叱ってしまう	38.7(11.3)	32.3(2.8)	22.8(1.3)	0.0(0.0)	0.0(0.0)	28.2(3.3)
子どもの扱いにムラがでてしまう	54.9(9.7)	36.9(2.8)	24.1(2.0)	8.3(8.3)	0.0(0.0)	33.4(3.7)
子どもとの対話がなくなってしまう	50.0(9.7)	44.7(5.1)	36.2(4.0)	8.3(0.0)	50.0(0.0)	40.8(5.1)
いいかげんな授業をしてしまう	59.7(14.5)	44.3(3.7)	28.2(0.7)	12.5(0.0)	0.0(0.0)	39.2(4.0)
子どもにあたってしまう	20.9(4.8)	20.8(0.5)	10.7(1.3)	0.0(0.0)	0.0(0.0)	16.3(1.3)
体罰をしてしまう	3.2(0.0)	2.8(0.0)	2.0(0.7)	0.0(0.0)	0.0(0.0)	2.4(0.2)
学校(授業)を休んでしまう	20.9(4.8)	16.5(1.8)	6.7(0.7)	4.2(0.0)	0.0(0.0)	13.3(1.8)
ほかの教師にあたってしまう	11.3(0.0)	9.2(0.0)	4.0(0.0)	0.0(0.0)	0.0(0.0)	7.3(0.0)

表5 - 3 学校(職場)に行きたくないと思うことと子どもたちに対する態度

単位：%

学校(職場)に行きたくないと思うこと		子どもたちに対する態度			
		いじめたと感じる	思わずどなってしまう	ムカつく	キれる
小学校教師	よくある	12.1(0.0)	73.6(18.7)	53.9(5.5)	23.1(1.1)
	ときどきある	11.0(0.6)	66.7(6.5)	34.6(1.6)	11.6(0.3)
	あまりない	9.0(0.0)	52.3(4.7)	21.0(1.7)	6.8(0.4)
	まったくない	1.9(0.0)	52.9(5.7)	7.6(1.9)	1.9(1.9)
	D.K.,N.A.	0.0(0.0)	0.0(0.0)	0.0(0.0)	0.0(0.0)
	計	9.8(0.3)	61.5(7.4)	30.4(2.2)	10.8(0.6)
中学校教師	よくある	16.1(1.6)	61.3(12.9)	71.0(21.0)	25.8(0.0)
	ときどきある	8.3(0.0)	53.0(4.6)	54.9(5.1)	20.3(0.5)
	あまりない	8.1(0.0)	47.0(2.7)	38.3(4.7)	12.1(0.7)
	まったくない	8.3(0.0)	41.7(4.2)	41.6(8.3)	4.2(0.0)
	D.K.,N.A.	0.0(0.0)	100.0(0.0)	50.0(0.0)	0.0(0.0)
	計	9.2(0.2)	51.8(5.1)	50.9(7.3)	17.4(0.4)

(注)1. それぞれの態度が「よくある」と「ときどきある」の2つの割合をあわせた数値。また、カッコ内の数値は、そのうち「よくある」の割合で内数を示している。

まう20.9%といった具合である。むろん、学校(職場)に行きたくないと思うということ、ストレスとがもともと密接に結びついていることからすれば当然の結果ともいえる。

それはともかく、この結果から考えると、学校(職場)に行きたくないと思っているということは、ただたんに消極的に休みたい、サボりたいといったことではない。それ以上に、ストレスと強く結びついて、すこし極端な表現をすれば「追い詰められた」ような状態におかれているのかもしれない。かりに、消極的に学校(職場)を休みたいと思っている程度であれば、これほど子どもたちに対してネガティブな影響が生じるとは、とても考えられない。さきほど、教師のストレスというのは予想以上に厳しいと述べた。そのことは、ここでもまた明らかである。教師が学校(職場)を休みたいと思うということは、かなり深刻な状態と考えてよい。

その深刻さは、つぎのいくつかの結果でも確認できる。教師としての自分自身の「ありかた」に直接的に関連するような問題である。表5-4をみると、ストレスのたまっている教師ほど、仕事にやりがいを感じるという割合が明らかに少ない。意欲喪失といった状態だろうか。そのつぎの表5-5では、やはりストレスのたまっている教師ほど、子どもたちの学力差は「教師の努力」で是正できるとは思わないという割合が高い。おそらく、これは一種の無力感にちがいない。一般に、まじめで熱心な人ほどストレスを感じやすく、「燃えつきてしまう」というバーンアウト現象がよく知られている⁵⁾。そうしたバーンアウト現象の一端は、表5-6からも若干うかがえる。つまり、「私が何とかしなければ」と思っている教師ほど、ストレスがたまるという構図である。しかし、そうしたストレスの結果、かえって逆に意欲喪失、無力感が生じてしまうといった状況がある。

そのうえ、表5-7をみればわかるように、ストレスのたまっている教師は、毎日の生活もほとんどゆとりがない。全体的にみて、もともと教師の生活はゆとりがないが、

表5-4 ストレスと仕事にやりがい

単位：%

学校段階・ ストレス状況		やりがい とても 感じている	やや 感じている	あまり 感じていない	まったく 感じていない	D.K.,N.A	計(N)
小学校 教師	とてもたまっている	37.4	49.6	12.2	0.0	0.8	100 (131)
	すこしたまっている	41.9	51.2	5.8	0.0	1.1	100 (363)
	あまりたまっていない	59.1	40.2	0.6	0.0	0.0	100 (164)
	まったくたまっていない	81.5	18.5	0.0	0.0	0.0	100 (27)
	D.K.,N.A	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	100 (2)
	計	46.7	46.9	5.7	0.0	0.7	100 (687)
中学校 教師	とてもたまっている	16.7	67.6	15.7	0.0	0.0	100 (102)
	すこしたまっている	33.3	54.5	11.7	0.0	0.5	100 (222)
	あまりたまっていない	46.7	49.5	2.8	0.0	0.9	100 (107)
	まったくたまっていない	85.7	14.3	0.0	0.0	0.0	100 (21)
	D.K.,N.A	50.0	50.0	0.0	0.0	0.0	100 (2)
	計	35.2	54.4	9.9	0.0	0.4	100 (454)

表5 - 5 学力差は「教師の努力」で是正できると思っていることとストレス

単位：%

学校段階・ 是正できる		ストレス状況	とても たまっている	すこし たまっている	あまり たまっていない	まったく たまっていない	D.K.,N.A.	計(N)
小学校 教師	とても思う		28.1	40.6	25.0	6.3	0.0	100.0 (32)
	やや思う		15.5	54.2	25.9	4.2	0.2	100.0 (406)
	あまり思わない		21.6	53.7	21.6	3.0	0.0	100.0 (231)
	まったく思わない		52.9	29.4	5.9	5.9	5.9	100.0 (17)
	D.K.,N.A.		0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0 (1)
	計		19.1	52.8	23.9	3.9	0.3	100.0 (687)
中学校 教師	とても思う		25.0	43.8	18.8	12.5	0.0	100.0 (16)
	やや思う		18.9	51.5	23.8	5.7	0.0	100.0 (227)
	あまり思わない		23.3	47.2	25.6	2.8	1.1	100.0 (180)
	まったく思わない		43.3	40.0	13.3	3.3	0.0	100.0 (30)
	D.K.,N.A.		0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0 (1)
	計		22.5	48.9	23.6	4.6	0.4	100.0 (454)

表5 - 6 子どもの将来を考えて「私がなんとかしなければ」と思っていることとストレス

単位：%

学校段階・ 「私が何とかしなければ」		ストレス状況	とても たまっている	すこし たまっている	あまり たまっていない	まったく たまっていない	D.K.,N.A.	計(N)
小学校 教師	とても思う		25.9	46.9	21.0	6.2	0.0	100.0 (81)
	やや思う		19.3	55.2	22.7	2.7	0.2	100.0 (415)
	あまり思わない		15.6	50.8	28.5	5.0	0.0	100.0 (179)
	まったく思わない		10.0	50.0	20.0	20.0	0.0	100.0 (10)
	D.K.,N.A.		50.0	0.0	0.0	0.0	50.0	100.0 (2)
	計		19.1	52.8	23.9	3.9	0.3	100.0 (687)
中学校 教師	とても思う		36.5	32.7	23.1	7.7	0.0	100.0 (52)
	やや思う		20.5	49.2	24.8	5.4	0.0	100.0 (258)
	あまり思わない		21.1	55.5	21.1	2.3	0.0	100.0 (128)
	まったく思わない		25.0	41.7	33.3	0.0	0.0	100.0 (12)
	D.K.,N.A.		0.0	50.0	0.0	0.0	50.0	100.0 (4)
	計		22.5	48.9	23.6	4.6	0.4	100.0 (454)

ストレスのたまっている教師はとくに極端である。もっとも、これに関しては、ゆとりがないからストレスなのか、それともストレスによってゆとりがなくなってしまったのか、その因果関係については明確ではない。ただ、しかし、その両者が相乗効果のようなかたちで、教師の現実をより厳しいものに行っていることだけはまちがいない。

表5 - 7 ストレスと毎日の生活

単位：%

学校段階・ ストレス状況		毎日の生活	とても ゆとりがある	やや ゆとりがある	あまり ゆとりがない	まったく ゆとりがない	D.K.,N.A	計(N)
小学校 教師	とてもたまっている		0.8	3.1	27.5	68.7	0.0	100 (131)
	すこしたまっている		0.3	10.5	59.2	29.8	0.3	100 (363)
	あまりたまっていない		1.2	20.7	64.6	13.4	0.0	100 (164)
	まったくたまっていない		7.4	48.1	37.0	7.4	0.0	100 (27)
	D.K.,N.A		0.0	0.0	50.0	50.0	0.0	100 (2)
	計		0.9	13.0	53.6	32.5	0.1	100 (687)
中学校 教師	とてもたまっている		1.0	0.0	32.4	66.7	0.0	100 (102)
	すこしたまっている		0.0	10.8	59.9	28.8	0.5	100 (222)
	あまりたまっていない		0.9	29.0	59.8	10.3	0.0	100 (107)
	まったくたまっていない		0.0	33.3	47.6	19.0	0.0	100 (21)
	D.K.,N.A		0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100 (2)
	計		0.4	13.7	53.3	32.4	0.2	100 (454)

6 . ストレスの背景

教師にこれほど厳しいストレスをもたらしている背景には、いったいどんな状況があるのか。むろん、ストレスという現象自体は、かなり個人的、個別的な事情による部分も少なくない。しかし、ここでは多くの教師にストレスをもたらしている教育状況を問題にしている。たとえば、それぞれの学校における教師集団の人間関係であるとか、校長のリーダーシップ能力に関する問題、あるいはクラスの子どもの状況といったようなものである。そうしたことが、教師1人ひとりのストレスといかなるかたちで結びついているのかを分析することによって、現実の教師を圧迫している教育状況を問題にすることにしたい。したがって、教師のストレスの背景といっても、個人的、個別的なものではなく、教師という職業に関連する「構造的な」背景が対象である。いわば、「教育ストレス」の検討といってもよい。以下、ストレスの背景に関して概略的にみておきたい。

最初の表6 - 1に示した結果は、それぞれの学校における教師集団の人間関係の状況と、教師のストレスとの関係を示したものである。また、そのつぎの表6 - 2は、そうした教師集団の人間関係のことで悩むことと、教師のストレスとの関係を示したものである。この人間関係のことで悩むこととストレスとの関係に関しては、現実悩んでいるという事実からすれば、ストレスと強く結びついていることは当然の結果ともいえる。しかし、この2つの結果に加えて、表6 - 3に示した状況をあわせて考えると、いま教師集団の人間関係にはさまざまな問題状況が生じており、しかもこれが教師のストレスの主要な原因のひとつになっていることはまちがいない。

むろん、教師にかぎらず、ストレスには人間関係に関連する要素の強いことが、経験

表 6 - 1 教師集団の人間関係とストレス

単位：%

学校段階・人間関係		ストレス状況	とても たまっている	すこし たまっている	あまり たまっていない	まったく たまっていない	D.K.,N.A.	計(N)
小学校教師		とてもよい	15.4	48.7	26.5	9.4	0.0	100 (117)
		ややよい	15.5	55.3	25.5	3.2	0.5	100 (380)
		あまりよくない	26.5	51.8	20.5	1.2	0.0	100 (166)
		まったくよくない	42.9	38.1	9.5	9.5	0.0	100 (21)
		D.K.,N.A.	33.3	66.7	0.0	0.0	0.0	100 (3)
		計	19.1	52.8	23.9	3.9	0.3	100 (687)
中学校教師		とてもよい	17.4	32.6	34.8	15.2	0.0	100 (46)
		ややよい	17.8	51.6	25.2	5.4	0.0	100 (258)
		あまりよくない	28.5	50.8	19.2	0.0	1.5	100 (130)
		まったくよくない	68.8	31.3	0.0	0.0	0.0	100 (16)
		D.K.,N.A.	0.0	75.0	25.0	0.0	0.0	100 (4)
		計	22.5	48.9	23.6	4.6	0.4	100 (454)

表 6 - 2 教師同士の人間関係のことで悩むこととストレス

単位：%

学校段階・悩むこと		ストレス状況	とても たまっている	すこし たまっている	あまり たまっていない	まったく たまっていない	D.K.,N.A.	計(N)
小学校教師		よくある	59.1	29.5	11.4	0.0	0.0	100 (44)
		ときどきある	22.6	60.1	14.9	2.2	0.3	100 (323)
		あまりない	11.0	49.0	32.7	6.8	0.4	100 (263)
		まったくない	5.4	46.4	44.6	3.6	0.0	100 (56)
		D.K.,N.A.	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100 (1)
		計	19.1	52.8	23.9	3.9	0.3	100 (687)
中学校教師		よくある	62.8	34.9	2.3	0.0	0.0	100 (43)
		ときどきある	23.8	52.4	20.8	2.4	0.6	100 (168)
		あまりない	15.6	49.8	29.8	4.4	0.5	100 (205)
		まったくない	8.3	44.4	25.0	22.2	0.0	100 (36)
		D.K.,N.A.	0.0	50.0	50.0	0.0	0.0	100 (2)
		計	22.5	48.9	23.6	4.6	0.4	100 (454)

表 6 - 3 学校での教師同士のいじめ行為とストレス

単位：%

学校段階・いじめ行為		ストレス状況	とても たまっている	すこし たまっている	あまり たまっていない	まったく たまっていない	D.K.,N.A.	計(N)
小学校教師		よくある	47.6	28.6	23.8	0.0	0.0	100 (21)
		ときどきある	31.0	47.0	19.0	3.0	0.0	100 (100)
		あまりない	15.1	61.8	21.1	1.1	1.1	100 (186)
		まったくない	16.3	51.2	26.7	5.9	0.0	100 (375)
		D.K.,N.A.	20.0	60.0	20.0	0.0	0.0	100 (5)
		計	19.1	52.8	23.9	3.9	0.3	100 (687)
中学校教師		よくある	70.6	23.5	0.0	5.9	0.0	100 (17)
		ときどきある	31.8	51.1	11.4	4.5	1.1	100 (88)
		あまりない	18.7	54.7	25.9	0.7	0.0	100 (139)
		まったくない	17.4	46.4	29.0	7.2	0.0	100 (207)
		D.K.,N.A.	0.0	33.3	33.3	0.0	33.3	100 (3)
		計	22.5	48.9	23.6	4.6	0.4	100 (454)

的にも明らかである。したがって、学校(職場)における人間関係が、教師のストレスの原因になっていることも当然といえば当然の結果である。しかし、ストレスは人間関係によるところが大きいという基本的な部分に関しては共通しているとしても、教師の職務形態からくる人間関係の特異性という側面もあり、そうした立場からこの問題にアプローチをする必要性を感じる。

つぎの表6-4は、校長のリーダーシップ能力に関する問題である。これをみると、教師のストレスと一定の関連は認められるが、それほど強いものではない。それよりも、そのつぎの表6-5に示した、学校が仕事にやる気をもたらしてくれる雰囲気かどうかということと教師のストレスとは密接に結びついていることがわかる。たとえば、小学校教師をみても、学校がとてもやる気ができる雰囲気という場合、ストレスがとても

表6-4 校長のリーダーシップ能力とストレス

単位：%

学校段階・リーダーシップ能力		ストレス状況	とても たまっている	すこし たまっている	あまり たまっていない	まったく たまっていない	D.K.,N.A.	計(N)
小学校教師	とても思う		17.1	43.4	31.6	6.6	1.3	100 (76)
	やや思う		17.7	51.6	26.5	3.9	0.4	100 (283)
	あまり思わない		16.5	58.9	21.2	3.5	0.0	100 (231)
	まったく思わない		31.5	47.8	17.4	3.3	0.0	100 (92)
	D.K.,N.A.		20.0	80.0	0.0	0.0	0.0	100 (5)
	計		19.1	52.8	23.9	3.9	0.3	100 (687)
中学校教師	とても思う		12.8	46.8	31.9	8.5	0.0	100 (47)
	やや思う		22.3	48.0	25.1	4.5	0.0	100 (179)
	あまり思わない		19.9	53.4	24.7	2.1	0.0	100 (146)
	まったく思わない		34.7	45.3	13.3	5.3	1.3	100 (75)
	D.K.,N.A.		14.3	28.6	14.3	28.6	14.3	100 (7)
	計		22.5	48.9	23.6	4.6	0.4	100 (454)

表6-5 学校が仕事にやる気をもたらしてくれる雰囲気かどうかということとストレス

単位：%

学校段階・やる気		ストレス状況	とても たまっている	すこし たまっている	あまり たまっていない	まったく たまっていない	D.K.,N.A.	計(N)
小学校教師	とてもやる気ができる		5.9	45.1	29.4	19.6	0.0	100 (51)
	やややる気ができる		13.2	50.7	31.9	3.9	0.3	100 (357)
	あまりやる気がでない		24.3	61.3	13.2	1.2	0.0	100 (243)
	まったくやる気がでない		68.8	25.0	6.3	0.0	0.0	100 (32)
	D.K.,N.A.		0.0	50.0	25.0	0.0	25.0	100 (4)
	計		19.1	52.8	23.9	3.9	0.3	100 (687)
中学校教師	とてもやる気ができる		9.4	25.0	46.9	18.8	0.0	100 (32)
	やややる気ができる		15.9	52.7	24.5	6.8	0.0	100 (220)
	あまりやる気がでない		29.5	50.6	19.9	0.0	0.0	100 (176)
	まったくやる気がでない		54.5	36.4	9.1	0.0	0.0	100 (22)
	D.K.,N.A.		0.0	25.0	25.0	0.0	50.0	100 (4)
	計		22.5	48.9	23.6	4.6	0.4	100 (454)

たまっているという割合は5.9%にとどまっている。これに対して、まったくやる気がでないという場合になると、この割合が68.8%に達している。中学校教師でもまったく同じパターンを描いており、9.4%に対して54.5%の割合である。

ただ、やる気をもたらししてくれる雰囲気というものが、具体的にどんなものなのか、これだけのデータではかならずしも明らかではない。おそらく、さきほどの教師集団の人間関係であるとか、校長のリーダーシップ能力といったものの総体であろうと思われる。かつて、教師のモラルに関する研究も、それなりに行なわれてきた⁶⁾。今後、そうした研究成果もふまえたうえで、教師のストレスといった立場からモラル、やる気といった問題を考えていく必要性を感じる。

さらに、表6-6から表6-9に示したいいくつかの結果は、子どもたちとの関係、な

表6-6 1人ひとりの子どもと十分なコミュニケーションがとれていることとストレス

単位：%

ストレス状況 学校段階・ コミュニケーションがとれている		とても たまっている	すこし たまっている	あまり たまっていない	まったく たまっていない	D.K.,N.A.	計(N)
小学校 教師	とても思う	17.9	39.3	25.0	17.9	0.0	100.0(28)
	やや思う	15.8	53.4	26.1	4.4	0.3	100.0(341)
	あまり思わない	20.9	54.9	21.5	2.4	0.3	100.0(297)
	まったく思わない	52.9	23.5	23.5	0.0	0.0	100.0(17)
	D.K.,N.A.	25.0	75.0	0.0	0.0	0.0	100.0(4)
	計	19.1	52.8	23.9	3.9	0.3	100.0(687)
中学校 教師	とても思う	20.0	30.0	30.0	20.0	0.0	100.0(10)
	やや思う	18.4	47.2	25.8	8.0	0.6	100.0(163)
	あまり思わない	21.7	52.0	23.6	2.4	0.4	100.0(254)
	まったく思わない	58.3	33.3	8.3	0.0	0.0	100.0(24)
	D.K.,N.A.	33.3	66.7	0.0	0.0	0.0	100.0(3)
	計	22.5	48.9	23.6	4.6	0.4	100.0(454)

表6-7 いまのクラスで子ども同士のいじめがおこることとストレス

単位：%

ストレス状況 学校段階・ いまのクラスでいじめ		とても たまっている	すこし たまっている	あまり たまっていない	まったく たまっていない	D.K.,N.A.	計(N)
小学校 教師	よくある	50.0	33.3	16.7	0.0	0.0	100.0(6)
	ときどきある	24.2	57.6	16.2	2.0	0.0	100.0(99)
	あまりない	13.0	57.6	28.2	1.1	0.0	100.0(177)
	まったくない	20.1	49.3	24.7	5.6	0.3	100.0(377)
	D.K.,N.A.	18.8	56.3	15.6	6.3	3.1	100.0(32)
	計	19.1	52.8	23.9	3.9	0.3	100.0(687)
中学校 教師	よくある	66.7	33.3	0.0	0.0	0.0	100.0(9)
	ときどきある	28.7	52.9	16.1	1.1	1.1	100.0(87)
	あまりない	16.3	55.3	27.7	0.7	0.0	100.0(141)
	まったくない	22.8	41.9	24.6	10.8	0.0	100.0(167)
	D.K.,N.A.	20.0	50.0	26.0	2.0	2.0	100.0(50)
	計	22.5	48.9	23.6	4.6	0.4	100.0(454)

いしは子どもたちの問題行動に関するものである。これらの結果をざっとみてみると、教師のストレスとのあいだにそれほど明確なパターンはない。たとえば、表6-6と表6-7をみると、子どもとのコミュニケーションがまったくとれていない、いじめがよくおこるといったもっともネガティブなケースの場合は、たしかにストレスがとてまたまっているという教師が多い。しかし、それ以外の場合は、ストレスとあまり関連性がみられない。そして、つぎの表6-8と表6-9に示した子どもたちからなめられている、授業妨害のいずれをみても、さきほどの教師集団の人間関係ややる気をもたらしてくれる雰囲気といった問題と比べると、それほど大きな差異はみられない。

そうすると、子どもたちの「荒れ」というのは、その当事者の教師にとってはたいへんなストレスになるが、かといって「荒れ」の程度によってストレス状況が変わるといっ

表6-8 クラスの子どもたちからなめられていることとストレス

単位：%

学校段階・ なめられている		ストレス状況				D.K.,N.A.	計(N)
		とても たまっている	すこし たまっている	あまり たまっていない	まったく たまっていない		
小学校 教師	とても思う	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0(1)
	やや思う	36.4	45.5	16.4	0.0	1.8	100.0(55)
	あまり思わない	19.2	56.9	21.7	2.0	0.3	100.0(355)
	まったく思わない	15.5	49.4	27.5	7.5	0.0	100.0(265)
	D.K.,N.A.	18.2	45.5	36.4	0.0	0.0	100.0(11)
	計	19.1	52.8	23.9	3.9	0.3	100.0(687)
中学校 教師	とても思う	50.0	30.0	0.0	20.0	0.0	100.0(10)
	やや思う	31.8	51.8	15.5	0.9	0.0	100.0(110)
	あまり思わない	18.7	50.6	25.5	4.7	0.4	100.0(235)
	まったく思わない	18.6	39.5	33.7	8.1	0.0	100.0(86)
	D.K.,N.A.	15.4	69.2	7.7	0.0	7.7	100.0(13)
	計	22.5	48.9	23.6	4.6	0.4	100.0(454)

表6-9 いまのクラスでの授業妨害とストレス

単位：%

学校段階・授業妨害		ストレス状況				D.K.,N.A.	計(N)
		とても たまっている	すこし たまっている	あまり たまっていない	まったく たまっていない		
小学校 教師	よくある	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0(1)
	ときどきある	36.0	40.0	20.0	0.0	4.0	100.0(25)
	あまりない	24.7	57.1	18.2	0.0	0.0	100.0(77)
	まったくない	17.6	52.6	24.8	4.8	0.2	100.0(568)
	D.K.,N.A.	18.8	56.3	25.0	0.0	0.0	100.0(16)
	計	19.1	52.8	23.9	3.9	0.3	100.0(687)
中学校 教師	よくある	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0(2)
	ときどきある	37.9	44.8	17.2	0.0	0.0	100.0(29)
	あまりない	33.3	49.3	17.3	0.0	0.0	100.0(75)
	まったくない	18.4	48.8	26.5	6.0	0.3	100.0(332)
	D.K.,N.A.	18.8	62.5	6.3	6.3	6.3	100.0(16)
	計	22.5	48.9	23.6	4.6	0.4	100.0(454)

たものではなさそうである。いうまでもなく、クラスの子どもたちとの関係がかなり崩れているとか、クラスで問題行動がよく生じるといった教師にとっては、きわめて厳しいストレスが予想される。しかし、この程度によってストレスの状況に変化が生じるといった、いわば「構造的な」ストレス要因ではない。子どもたちの「荒れ」がなにかと話題になる現在、教師のストレスといえども子どもたちとの関係、子どもたちの「荒れ」と考えがちである。むしろ、そうした状況におかれている当事者の教師の個別的なストレスについてはともかく、多くの教師を圧迫している構造的で、基本的なストレスの背景は、もっとべつのところから生じていると考えてよい。

7. 教師のストレスと子どもたちのストレス

ストレスの背景がどんなものであるにせよ、多くの教師はそうしたストレスを日常的にかかえて子どもたちに接している。これに関して、きわめて象徴的な事実がある。表7-1と表7-2に示した結果である。これをみると、ストレスのたまっている教師のクラスほど、ストレスのたまっている子どもが多い。あるいは、クラスにストレスのたまっている子どもが多いという教師ほど、自分自身もストレスがたまっているということになるのかもしれない。教師のストレスによって子どもたちもストレスなのか、それとも子どもたちのストレスによって教師もストレスなのか、これについてはどちらがさきか、かならずしも明確ではない。その意味で、ここではいわゆるヨコ・パーセントとタテ・パーセントの2つの割合を示しておいた。

そのどちらが正しいということより、むしろ問題はそうした教師のストレスと子どもたちのストレスとの接点が「教室」というところである。この文脈で考えると、いまの教室というのは、教師のストレスと子どもたちのストレスがぶつかっている場所ということになる。本小論では、教師のストレスを中心にして論述してきたが、いっぽうで子どもたちのストレス状況も、ある意味で教師以上に厳しい。表7-3に示したように、ストレスがたまっている子どもたち(小学校5・6年生、中学校1・2・3年生)は、かなりの割合にのぼっている。そのうえ、この割合は、明らかに増加傾向をみせている。しかも、これにともなって、表7-4と表7-5をみればわかるように、ストレスによるさまざまな症状が多くの子どもたちに生じている。そして、ほとんどの症状が、これまたかなりの増加傾向を示している。

なお、表7-3、表7-4、そして表7-5には「福岡」と記載しているが、これはつぎのような理由による。「平成4年」のデータは、1992(平成4年)7月、および9月～11月に、福岡県内の小・中学校で、小学校5・6年生と中学校1・2・3年生を対象にして実施した調査の結果である。また、「平成11年」のデータは、1999(平成11年)11月～2000(平成12年)3月に、福岡県内と関西地域のいくつかの小・中学校で、同じく小学校5・6年生と中学校1・2・3年生を対象にして実施した調査の結果である。ここで

表7 - 1 教師のストレスと子どもたちのストレス(小学生)

単位：％ (上段：ヨコ・パーセント
下段：タテ・パーセント

教師のストレス状況 クラスにストレスの たまっている子	たくさん いる	すこしいる	あまり いない	まったく いない	D.K.,N.A	計(N)
	とてもたまっている	23.7 44.9	62.6 19.2	9.2 8.3	0.0 0.0	4.6 27.3
すこしたまっている	8.3 43.5	67.2 57.1	18.5 46.2	3.3 50.0	2.8 45.5	100.0(363) 52.8
あまりたまっていない	4.3 10.1	54.9 21.1	34.1 38.6	4.3 29.2	2.4 18.2	100.0(164) 23.9
まったくたまっていない	3.7 1.4	37.0 2.3	37.0 6.9	18.5 20.8	3.7 4.5	100.0(27) 3.9
D.K.,N.A	0.0 0.0	50.0 0.2	0.0 0.0	0.0 0.0	50.0 4.5	100.0(2) 0.3
計(N)	10.0 100.0(69)	62.2 100.0(427)	21.1 100.0(145)	3.5 100.0(24)	3.2 100.0(22)	100.0(687) 100.0(687)

表7 - 2 教師のストレスと子どもたちのストレス(中学生)

単位：％ (上段：ヨコ・パーセント
下段：タテ・パーセント

教師のストレス状況 クラスにストレスの たまっている子	たくさん いる	すこしいる	あまり いない	まったく いない	D.K.,N.A	計(N)
	とてもたまっている	51.0 44.8	43.1 16.4	3.9 7.8	0.0 0.0	0.0 11.8
すこしたまっている	22.5 43.1	63.5 52.6	8.1 35.3	0.5 50.0	5.4 70.6	100.0(222) 48.9
あまりたまっていない	12.1 11.2	67.3 26.9	18.7 39.2	0.0 0.0	1.9 11.8	100.0(107) 23.6
まったくたまっていない	0.0 0.0	52.4 4.1	42.9 17.6	4.8 50.0	0.0 0.0	100.0(221) 4.6
D.K.,N.A	50.0 0.9	0.0 0.0	0.0 0.0	0.0 0.0	50.0 5.9	100.0(2) 0.4
計(N)	25.6 100.0(116)	59.0 100.0(268)	11.2 100.0(51)	0.4 100.0(2)	3.7 100.0(17)	100.0(454) 100.0(454)

表7 - 3 子どもたちのストレス状況に関する推移(福岡)

単位：％

学校段階・年度	ストレス状況	とても たまっている	すこし たまっている	あまり たまっていない	まったく たまっていない	D.K.,N.A.	計(N)
	小学生	平成4年	9.5	21.9	39.8	28.5	0.4
	平成11年	12.2	35.3	34.7	17.8	0.0	100.0(320)
中学生	平成4年	10.1	33.6	40.6	15.7	0.0	100.0(763)
	平成11年	22.3	42.2	27.9	7.1	0.6	100.0(1403)

(注)1.小学生は5・6年生、中学生は1・2・3年生である。
2.福岡県内の小・中学生のサンプルだけをとりだして集計を行なった。
(つぎの表7 - 4と表7 - 5についても同様)

表7-4 ストレスによるさまざまな症状の発生状況に関する推移(小学校5・6年生、福岡)

単位：%

症 状	年 度			平成11年		
	平成4年	よくなる	ときどきある	計	よくなる	ときどきある
イライラする	13.7	30.3	44.0	23.4	29.4	52.8
腹が立つ	12.8	25.8	38.6	20.3	27.2	47.5
よく眠れない	10.6	15.3	25.9	12.2	19.1	31.3
食欲がない	5.5	11.6	17.1	5.6	15.9	21.5
やる気がでない	8.1	19.4	27.5	17.8	25.0	42.8
病気ではないのに頭がいたい	7.7	15.0	22.7	10.3	21.9	32.2
病気ではないのにおなかがいたい	4.2	12.9	17.1	5.6	20.0	25.6
教室に入りたくない	1.9	3.8	5.7	4.1	8.8	12.9
授業を受けるのがきつい	4.7	8.4	13.1	9.7	14.1	23.8
先生と話したくない	2.9	4.1	7.0	5.6	8.4	14.0
先生に反抗したい	6.0	5.1	11.1	7.2	7.5	14.7
友人と話したくない	2.8	8.1	10.9	2.5	8.1	10.6
だれかをいじめたい	3.7	7.2	10.9	3.1	4.7	7.8
ものを壊したい	4.7	5.1	9.8	6.6	6.9	13.5
ものを投げつけない	4.9	6.8	11.7	5.0	7.8	12.8
大声をだしたい	8.1	8.6	16.7	11.9	13.1	25.0
暴れたい	7.4	7.8	15.2	7.8	6.6	14.4
泣きたい	3.7	6.8	10.5	6.3	8.1	14.4
家に帰りたくない	2.2	4.1	6.3	3.8	5.0	8.8

(注)1. ストレスの症状については、病的なものだけでなく多様なものを問題にした。したがって、ここではストレスによる、あくまでも広い意味における症状と考えてよい。

2. 「計」は、それぞれの行為を「よくなる」と「ときどきある」の2つの割合をあわせた数値である。

(つぎの表7-5についても同様)

表7-5 ストレスによるさまざまな症状の発生状況に関する推移(中学校1・2・3年生、福岡)

単位：%

症 状	年 度			平成11年		
	平成4年	よくなる	ときどきある	計	よくなる	ときどきある
イライラする	23.6	36.4	60.0	36.1	37.7	73.8
腹が立つ	21.9	35.3	57.2	34.6	35.4	70.0
よく眠れない	9.6	15.6	25.2	16.3	16.7	33.0
食欲がない	4.5	13.1	17.6	8.6	14.1	22.7
やる気がでない	18.5	33.6	52.1	26.4	35.6	62.0
病気ではないのに頭がいたい	8.7	18.9	27.6	13.7	19.5	33.2
病気ではないのにおなかがいたい	8.7	16.8	25.5	12.8	20.2	33.0
教室に入りたくない	2.6	4.8	7.4	6.3	8.4	14.7
授業を受けるのがきつい	10.9	22.5	33.4	18.9	25.1	44.0
先生と話したくない	6.0	9.3	15.3	12.8	15.0	27.8
先生に反抗したい	8.3	9.6	17.9	11.8	10.1	21.9
友人と話したくない	2.2	10.6	12.8	2.6	8.3	10.9
だれかをいじめたい	3.9	5.9	9.8	4.0	5.8	9.8
ものを壊したい	7.1	9.0	16.1	11.6	10.8	22.4
ものを投げつけない	7.2	12.1	19.3	12.3	11.8	24.1
大声をだしたい	8.7	12.8	21.5	20.0	18.2	38.2
暴れたい	8.8	9.8	18.6	13.8	9.3	23.1
泣きたい	6.2	10.0	16.2	9.8	10.9	20.7
家に帰りたくない	5.0	7.6	12.6	7.2	10.3	17.5

は、その「平成4年」と「平成11年」の2つのデータを比較しているため、「平成11年」のデータについては、福岡県内の小・中学生のサンプルだけをとりだして集計を行なった。

こうした、子どもたちのストレスの背景のひとつとして、表7-6と表7-7に示した「授業」という問題がある。授業がわからないという子どもほど、そして、それ以上に授業が楽しくないという子どもほど、ストレスがたまっている実態がよくわかる。しかも、これに関する問題は、たんにストレスだけのことではない。図7-1と図7-2に示した結果をみると、子どもたちの学校適応にとって、授業がいかに重要な要因であるか理解できる。小・中学生ともに、「学校が好き」ということと「授業が楽しい」ということとが、かなり高い相関係数をもって結びついている。この相関係数をみると、「学校が好き」ということと「教師が好き」ということとの相関係数を、はるかにうわ

表7-6 学校の授業がわかるということと子どもたちのストレス

単位：%

ストレス状況 授業がわかる		とても	すこし	あまり	まったく	D.K.,N.A.	計(N)
		たまっている	たまっている	たまっていない	たまっていない		
小学生	とてもわかる	14.4	36.7	34.5	14.4	0.0	100.0 (139)
	だいたいわかる	12.0	32.8	42.1	13.2	0.0	100.0 (409)
	あまりわからない	27.3	36.4	26.0	10.4	0.0	100.0 (77)
	まったくわからない	37.5	25.0	0.0	31.3	6.3	100.0 (16)
	D.K.,N.A.	40.0	20.0	20.0	20.0	0.0	100.0 (5)
	計	15.2	33.7	37.3	13.6	0.2	100.0 (646)
中学生	とてもわかる	18.8	32.0	33.6	15.6	0.0	100.0 (128)
	だいたいわかる	16.9	42.6	32.5	7.5	0.5	100.0 (948)
	あまりわからない	30.9	43.3	20.8	4.0	1.0	100.0 (404)
	まったくわからない	40.7	30.9	19.8	8.6	0.0	100.0 (81)
	D.K.,N.A.	25.0	37.5	37.5	0.0	0.0	100.0 (8)
	計	21.9	41.3	28.9	7.3	0.6	100.0 (1569)

表7-7 学校の授業が楽しいということと子どもたちのストレス

単位：%

ストレス状況 授業が楽しい		とても	すこし	あまり	まったく	D.K.,N.A.	計(N)
		たまっている	たまっている	たまっていない	たまっていない		
小学生	とても楽しい	10.2	25.2	37.0	27.6	0.0	100.0 (127)
	やや楽しい	9.9	37.2	42.6	10.3	0.0	100.0 (312)
	あまり楽しくない	23.3	35.6	32.5	8.6	0.0	100.0 (163)
	まったく楽しくない	41.0	23.1	20.5	12.8	2.6	100.0 (39)
	D.K.,N.A.	0.0	60.0	0.0	40.0	0.0	100.0 (5)
	計	15.2	33.7	37.3	13.6	0.2	100.0 (646)
中学生	とても楽しい	13.3	28.9	38.9	16.7	2.2	100.0 (90)
	やや楽しい	13.9	41.1	36.2	8.5	0.3	100.0 (657)
	あまり楽しくない	23.7	46.5	25.0	4.0	0.8	100.0 (600)
	まったく楽しくない	44.7	32.7	13.9	8.7	0.0	100.0 (208)
	D.K.,N.A.	42.9	35.7	14.3	7.1	0.0	100.0 (14)
	計	21.9	41.3	28.9	7.3	0.6	100.0 (1569)

このことに直接的に関連するが、教師の授業に対して、子どもたちはじつに冷静に、しかも厳しい評価をくだしている。教師の授業に対して「へた」だと思うところを、自由記述のかたちで書いてもらったものである。以下、いくつか紹介しておきたい。なお、文章は子どもたちが書いたそのままの表現である。まず、小学校5年生の男子である。「むだな話が多い」、「算数の教え方がだめ」、「むりやり理解させようとする。」、「子どもへの言いいかた。」、「むりやり、授業の構成を自分のペースで進めるところ。」、「教科書通り!」、「要点、発展問題を教えない」、「教科書どおりでやる気がきえる。せつめいへた」、「あまりじゅぎょうが進まない」といったようなものがあがっている。

小学校5年生の女子になると、「はなしをしすぎてじゅぎょうがつぶれる」、「話が長いとき。くだくだいうとききずらい」、「すぐ、わかりましたね、でおわらせてしまう」、「せつとく力がない」、「すぐ授業をすすんでいく」、「授業が、おくれたからといって、教科書をすらすらよむだけ。そして、いきなりテスト。」、「理由を言うのがへた」といった具合。

小学校6年生の男子では、「何を言っているのかわからない」、「理科の実験」、「しゃべっているときなにをいっているのかわからないときがある」、「よく字をまちがえるところ」、「ぼくたちのしゃべるばんがない」といったようなもの。同じく小学校6年生の女子では、「なんていっているか、わからない所」、「はや口です。」、「ちがう(よけいな)はなしが、よく出る」、「話がむずかしい」、「算数のせつめい」、「算数で教えなければいけない所をちゃんと教えてくれない」、「説明がわかりにくいときがある。」、「全々楽しい授業じゃない」、「わかりにくい」、「もう少しスピードを速く」、「私達に言葉が伝わっていないのにどんどんすすんでいってしまう」、「話が長くてあまり授業がすすまない」といった記述がある。

続いて、中学生である。1年生の男子では、「字がへた」、「言っていることが分からん」、「すぐ、つぎにすすむ」、「ふくしゅうをしない」、「わかりにくい」、「まとめきれない所」、「話しているいみがわからない」といったものがある。1年生の女子では、「伝えなくてはならないものをわすれて言わないところ」、「何人かの人だけちゅういする。せつめいがわからない」、「話がへた」、「一人でしゃべる」、「早口、一口一口がはっきりしていない。」、「全部。説明がはやい。自分の言いたいことをいっておわる」といった具合。

また、中学校2年生の男子では、「進め方、しゃべりかた、進み具合。」、「教え方」、「授業のみとおしを立てるところ」、「人を納得させるのがへた。」といったようなもの。2年生の女子になると、「何言ってるのかわからない。」、「説明がよくわからない」、「授業にかんけいナイ別のはなしをするところ。黒板にさっさと字をかいてはなすところ。」、「黒板の書き方。授業のすすめ方」、「ムダが多い」、「教科書どおりにするところ」、「まだみんながノートをうつしているのにどんどんせつめいしていくところ。」、「黒板に書く図が、よくわからない」といったような記述。

そして、中学校の3年生である。男子では、「授業の進む速さ、教え方」,「空気をよんでない。」,「実例などの挙げ方が上手ではない。授業中のギャグがわけがわからない。」,「どこをノートにとっていいのかわからない」,「字が汚い、声が聞こえない、何を聞いているのか分かんない、おもしろみがない」といったものがあがっている。さらに、3年生の女子である。「生徒の気持ちを考えない」,「説明が長くて、だれも聞いていないことがある」,「大声を出すばかりで、何もわからない。自分ができるものだから、人ができないとバカにしたようないいかたをする。おこるばかりで、何をつたえたいか、さっぱりわからない。」,「時間の使い方」,「興味を持たせることが全くできていないところ」,「わかりにくい。何を言ってるのか分からない。字がきたない。話し方がばりへた。」,「ムダばかり、話の主旨が分からない。プリントばかり。」,「字がきたない、教え方がわからん(プリント配って“はい”おわりじゃ)」,「黒板にきちんと書かない、しかも字が雑。要点をはっきり言わない」,「何を言いたいのか分からない」,「もっちゃっとはきはきしてほしい」,「しゃべりすぎて黒板になにも書かなくて大声でしゃべる。なに言ってるか分からない。」といったようなきわめて厳しい意見がある。

いま紹介した意見は、多くの回答のなかのごく一部である。子どもたちは、教師の授業に対して、かなり冷静に評価しているとともに、じつに厳しい意見をもっていることがよくわかる。そして、こうした意見のなかには、授業に関して基本的ともいえる問題点の指摘も少なくない。これでは、子どもたちが教師に反発するのも無理はない。むしろ、多くの教師は、子どもたちを「なめて」いたわけではないだろう。むしろ、多忙やストレスに支配された日常性のなかで、しらすらすのうちに授業がおろそかになっていたのではないと思われる。しかし、そうした教師の状況についてはともかく、授業というのはまちがいなく学校生活の中心であり、基本的なものである。そのことを考えれば、いま学校がいかに深刻な問題状況を内在しているか、よく理解できる。

表7-8 ストレスと授業が苦痛

単位：%

学校段階・ ストレス状況		苦痛に思う	よくある	ときどき ある	あまりない	まったく ない	D.K.,N.A.	計(N)
小学校 教師	とてもたまっている		15.3	58.8	22.9	2.3	0.8	100 (131)
	すこしたまっている		4.4	57.9	33.9	2.8	1.1	100 (363)
	あまりたまっていない		0.6	37.8	54.3	6.7	0.6	100 (164)
	まったくたまっていない		0.0	25.9	51.9	22.2	0.0	100 (27)
	D.K.,N.A.		0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100 (2)
	計		5.4	52.1	37.3	4.4	0.9	100 (687)
中学校 教師	とてもたまっている		23.5	54.9	17.6	2.9	1.0	100 (102)
	すこしたまっている		7.2	57.7	28.8	4.5	1.8	100 (222)
	あまりたまっていない		3.7	45.8	43.9	6.5	0.0	100 (107)
	まったくたまっていない		0.0	28.6	52.4	19.0	0.0	100 (21)
	D.K.,N.A.		0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100 (2)
	計		9.7	53.1	30.8	5.3	1.1	100 (454)

多くの教師はさまざまな状況のなかで、忙しさに追われ、厳しいストレスをかかえこんでいる。その結果、もっとも基本的ともいえる授業に支障をきたしている。これに対して、子どもたちは、そうした授業に対して不満や反発をもち、なかにはストレスを感じているということも少なくない。まさに、悪循環である。そのうえ、さらにネガティブな状況もある。表7 - 8をみると、ストレスのたまっている教師ほど、授業をするのが苦痛という。これでは、ますますネガティブな状況を生みだしてしまう。

この結果をみるまでもなく、教師のストレスは、ただたんにその教師だけの問題にとどまるものではない。直接、間接を問わず、確実に子どもたちに対して影響がおよぶ。その意味でも、教師の日常性のかなりの部分をストレスが支配しているという実態を、早急に解消することが求められる。

註

1) 付表 - 1 使用したデータ(小・中学校教師)

単位：%(N)

学校段階 \ 性別	男 性	女 性	計
小学校教師	29.8(205)	70.2(482)	100.0(687)
中学校教師	50.0(227)	50.0(227)	100.0(454)
計	37.9(432)	62.1(709)	100.0(1141)

(注)1. 調査は、福岡県内の小・中学校教師を対象にして、2000年8月～9月に郵送法にて実施した。

なお、教師に関する平成2年データ、および平成8年データの詳細、また子ども(小・中学生)に関するデータの詳細については、以下の論文・文献を参照のこと。

- * 「教師のストレス 『教育ストレス』に関する調査研究」(『福岡教育大学紀要』第40号) 1991年、79～146ページ。
- * 「小学生のストレス 『教育ストレス』に関する調査研究」(『福岡教育大学紀要』第43号) 1994年、129～182ページ。
- * 「中学生のストレス 『教育ストレス』に関する調査研究」(『福岡教育大学紀要』第44号) 1995年、119～195ページ。
- * 「いじめ問題と子ども いじめ問題に関する調査研究」(『福岡教育大学紀要』第47号) 1998年、15～68ページ。
- * 「いじめ問題と教師 いじめ問題に関する調査研究」(『大阪大学人間科学部紀要』第25巻) 1999年、237～258ページ。
- * 「子どもたちの規範意識と非行・問題行動」(『大阪大学人間科学部紀要』第26巻) 2000年、123～155ページ。
- * 「小学生の『荒れ』に関する調査研究」(『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第27号) 2001年、157～188ページ。
- * 『生徒指導』、放送大学教育振興会、1999年。

2) NHK「日本の宿題」プロジェクト編『学校の役割は終わったのか』、日本放送出版協会、2001年、112～146ページ。

- 3) 秦 政春「小学生の『荒れ』に関する調査研究」(『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第27巻)、2001年、157～188ページ。
- 4) 秦 政春「『学級崩壊』という現象と教師・子ども」(『関西教育学会紀要』第24巻)、2000年、253～257ページ。
深谷昌志編『徹底解剖「学級の荒れ」』、学文社、2000年。
- 5) 岡東壽隆・鈴木邦治『教師の勤務構造とメンタルヘルス』、多賀出版、1997年。

Teacher's Characters of Daily Living at the Present Day ()

Masaharu HATA

The purpose of this article is to develop the discussion that “what situation elementary and junior high school teachers nowadays are in as a teacher.” The following subjects are investigated primarily. Teacher stress, a feeling of maladjustment to the job, influences on children that teacher stress has, and the source of stress are clarified based on several investigated data. The results and a suggestion are as follow :

- 1 . While many teachers have some job satisfaction with the very job, however, not a few of the teachers have a feeling of maladjustment ; for example, they are reluctant to go to school, they do not think of themselves for a teacher, and they are inclined to leave off the job.
- 2 . The problem of teacher stress is behind the above fact-findings. The percentage of teachers who feel stress is above 70% of the total of elementary and junior high school teachers. As the problems behind such stress, their pressure of work, their own competency as a teacher, human relation with colleagues are found.
- 3 . Teacher stress has manifold negative influences on children ; for instance, they hold classes at hazard, they scold children too harshly, and they miss a chance to converse with children.
- 4 . Also, the stress drives teachers themselves into a strong feeling of maladjustment and a feeling of helplessness. They have been deprived of latitude in their daily livings.
- 5 . Children who belong to the class that teachers who feel stress have build up stress. A vicious spiral is found in terms of stress at school. The adjustment of conditions around teachers is immediately required by a method of working teacher stress off.